

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Basket working in Japan (5) : Chūgoku Area

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 俊亀智 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004596">https://doi.org/10.15021/00004596</a>

## 中国地方タケカゴ細工の一側面

——日本列島におけるカゴ細工の諸系列 (5)——

中 村 俊 亀 智\*

- |               |                |
|---------------|----------------|
| I. 問題提起       | 3. 岡山県真庭郡勝山町月田 |
| II. 4つの事例     | 4. 岡山市         |
| 1. 鳥取市        | III. 若干の考察     |
| 2. 島根県鹿足郡津和野町 |                |

### I. 問題提起

中国地方は、以前から、竹細工のさかんな地方として知られている。

とくに、山ぞいの地帯では、身のしまった上質のマダケを産し、それを素材にしたカゴ細工のいくつかは、工芸的にも極めてすぐれたものとして、たかく評価されている。

ところが、これまで、この報告でひとつの根拠としてきた旧文部省史料館資料のタケカゴ細工をみると、この地方のカゴ細工は、わずか10例にすぎず [文部省史料館 1968: 36, 42, 52, 56, 74, 106, 146, 177], 全体的な展望をうる資料としては、充分なものとはいいがたい。

そこでここでは、次の手順によって、この小文をまとめることにした。

1 鳥取・岡山両県については、それぞれ、県立博物館所蔵の標本資料を参照し、また、カゴ細工の現状についての情報をいただき、全般的な状況の把握にとめた。広島・山口両県については、芸北民俗博物館の資料をみせていただくとともに、二、三の友人を介して資料をあつめた。

2 以上をもとにして、現在、タケカゴ細工の生産がおこなわれている地域のうち、役場、教育委員会などをお願いして、資料を提供して下さる方々を紹介していただき、(a) どのようなところで、(b) どのようなタケを素材にして、(c) どのような編み方で、(d) どのようなカゴ細工が作りだされてきたかについて、聞き書きをつくり、それを引用する形で小文を構成した。この種の引用文には\*をつけて他と区別した。

\* 国立民族学博物館第4研究部

3 それとともに、各地域のカゴ細工の特徴を把握するために、標本となりうる資料をわけていただき、その形態と技術上の特色を、これまでこの報告で用いてきた分析用語（文末の別表参照）を用いて記述し、他の地方のカゴ細工との比較研究のための足がかりとした。

4 なお、今回もまた、本文中には個人のお名前はださなかった。それぞれのカゴ細工は、それがどんなにすぐれたものであろうとも、その地域の文化が生みだしたものだとかんがえ、ここでもまた、地域の文化的遺産としてのカゴ細工という点を重視した。また、地元でつかう呼び名（いわゆる地方名、方言名）は、これまでの民俗文化財の調査の慣例にしたがい、片仮名で記し、古い長さや重さの単位は、換算して小数点以下2ケタの数字で示した。

5 この小文は、1977年度国立民族学博物館における各個研究の報告の一部である。瀬戸内海や日本海沿岸の漁具としてのカゴなど、中国地方のタケカゴ細工として、とりあげねばならないものは、数おおく残されている。いずれ機会があれば、手がけてみたいと思う。

## Ⅱ. 4 つ の 事 例

### 1. 鳥 取 市

#### a ところ

いうまでもなく、県庁の所在地で、かつて32万石の城下町としてさかえた所である。人口122,311, 世帯数35,384 (1975年)。第3次産業に従う人たちの割合は、全人口の56%を占め、所得のうえでもたかい比重をもつが、最近では、電気機械の生産額が出荷額の40%を占めるにいたっている。はやくから、二十世紀ナシや松葉ガニ、モズク、ほしかレイなどとともに、竹細工が名産としてあげられ、現在でも、約10軒ほどの竹細工店が、市内にミセをもつ [鳥取市 1976: 1, 2, 13, 27]。

#### b タケ

山陰のマダケは、寒冷なためか「質がしまって、かたい」\*といわれる。しかも、節と節とのあいだの長さが長く、細工につかうには、「45.45 cm から 56.06 cm ほどのものをつかう」\*。そういう良質のマダケは、「人家のまわりよりも、ブナやケヤキの混生林のなかにそだったもの」\*で、よいタケが得られる場所は、せいぜい、「半径5 km の範囲内で、3ヶ所か4ヶ所しかない」\*という。

ここでは、立竹をホネ(骨)、廻し竹をホダケという。

立竹は、底と胴の部分に縁の折こみ部分だけ余分にみて、「カゴの高さより 4.55 cm だけ長くとする」\*。

一般の家庭用のカゴの場合、立竹は、「割ったタケをミカワ(身皮)1枚にへぐ」\*。

大割、小割したタケを身竹と皮竹とにへぎ、身竹は1枚だけつかうだけで、内側の部分は捨ててしまうのである。

c 編み方

「鳥取でカゴといえば、テカゴのことをさす」\*。テカゴは、昔、<sup>つ</sup><sup>み</sup><sup>く</sup><sup>さ</sup>や田んぼのタニシをとりにつくるとき、畑へナスやキウリをとりにつくるとき、あるいは種モミなどをいれるカゴで、大中小の3つの種類があるという。ここでは、カゴの寸法をシキ(底のタテヨコ)で計るが、大は18.18 cm、中は15.15 cm、小は12.12 cmとなっている。

テカゴの底編は、4つ目目つぶしの編み方で、この編み方をここではイカダと呼ぶ。「俗にカゴゾコ(籠底)といえば、イカダのことである」\*。底編には、このほか、アジロ編(2つとび2つめぐり、または、3つとび3つめぐり)もなされたが、この編み方は身竹をおおかつかうようなカゴにみられ、「最近では、ほとんどやられない(身竹を多用するカゴよりも皮竹をたくさん入れたカゴのほうが、どうしても売れるので、身竹をおおかつかうカゴは最近では、ほとんど作らない)」\*。

テカゴの縁仕上げは野田口仕上げで、これをここではアテブチといっている。縁仕上げには、このほか、マキブチ(巻縁)といって巻口仕上げの方法や、カエシマキ(返巻き)という蛇腹巻、それに、エビドメと呼ぶ共縁の手法が行われたが、いずれも、ごく限られたものにしかつかわれず、「数がすくない」\*という。

野田口仕上げの場合、縁のところでは立竹を折りまげ、内側の縁竹(これをウチブチという)と外側の縁竹とのあいだにササラをいれる。「ササラは、カブ(株)のほうから6枚、または、8枚に割り、さばきがよいように、先のほうでとめる」\*という。

カゴの形ができあがると、それに手をつけ、最後に力竹をかける。「手をかけるときには、節の位置に気をつけ、バランスをとること」\*が大切だという。力竹のことはハリダケ(張り竹)と呼ぶが、「力竹には、ハリダケと、底を編むときに、力竹をいれておかないと腰がたたないような4つ目のモノイレなどの力竹との2種類があり、後者のことはオコシダケという」\*。

いま、底のタテヨコが18.5 cm、カゴ本体の高さが22 cmのテカゴについて、その編み方をみると次のようになる。

まず、全体の形は、いわゆる円口方底型で肩がやや張り、口がややすぼまっているのが特徴で、それに、カゴの本体から15.5 cmの高さになるよう手がとりつけられ、総高は37.5 cm、重さは415 gとなっている。カゴの肩幅は27 cm、で、ちょうど口の広い陶器のツボを思わせ、全体として、手がたく量感にあふれた作りをみることができる。

立竹は幅12 mmで、タテヨコ7本の計14本で、厚さ1 mmほどに、やや薄くへいである。底編では、幅15ないし17 mmの皮竹をつかって目をふさいでいる。底編

では、とくに底の周囲を形作る立竹と、目つぶし竹のうちの2本に皮竹をつかい、編み目を強化している。

胴はザル目編で、底から出発した立竹は、かなり垂直にのぼってゆく。廻し竹は幅3mmで、立竹の本数からいって、ちょうど双子編のように、上下のタケを2本1組にして編んでゆくことがわかる。この場合には、上のタケが身竹、下のタケには皮竹がつかわれている。胴のふくらみは、底から17cmのところ、すなわち、全体の高さの下から3/4のところ、もっとも大きな値となる。

口の直径は、外側から外側まで24.5cmで、底のタテヨコより、約3割ほど広いことがわかる。縁の内側には幅18mm厚さ5mmの身竹、したがって、かなり厚い縁竹があててあり、それが全体の様子を引きしめるのに役立っている。縁の外側には同じ幅で、厚さ1mmの皮竹をいれ、幅15mmの幅のひろい縁が形作られる。ササラは8つに割り、厚さは3mm幅10mmで、ハリガネで10カ所ほどかがってとめてある。内側の縁竹は上下でおおきく面がとってある。

手は幅22mm厚さ4mmの丈夫なタケで、胴のもっとも幅のひろい部分からカゴの編み目にはいり、底のまんなかまできて、両端を交差させてとめられている。そのような手のつけ方にも、丁寧な仕事の有様をみることができる。

底の力竹は幅20mm厚さ3mm長さ25cmで、皮竹が対角線状にいれてある。

#### d 種類

ここでは、「戦前はテカゴやソウケが大量に作られた」\* という。養蚕がさかんになされた時代には、クワボテやカイコカゴなどが作られた。「竹細工で、テカゴを編むのは、ほんの手はじめのようなものだ」\*。それでも、「戦前は、テカゴだけを専門にこしらえて生計をたてていた人たちもいたほどだ」\*。

1958年前後には、動力のタケへぎ機械が導入され、ナシカゴやマツバガニをいれるカゴの量産が可能になる。そのいっぽうでは、量産がむずかしい、工芸竹細工としてのカゴが専門に作りだされている。

## 2. 島根県鹿足郡津和野町

### a ところ

津和野町は山口市と益田市とのほぼ中間にあり、古い武家屋敷や商家のたたずまいから、山陰の小京都といわれる。最近では、「全国各地から観光客が急激に増加し」「健康的な観光商業都市として発展しつつある」[津和野町 1975: 1]。町域の80%余りが山林で、「平地はきわめてすくなく」、林業のほか、コメ、茶、クリ、シイタケ、ワサビなど作られている。第1次産業に従う人たちの割合は、1955年には第3次産業のその、ほぼ2倍となっていたが、1965年にはほぼ等しくなり、その状況が現在までつづいている。

b タケ

カゴ細工の「材料は全部マダケで、3年ぐらいのものを近くの家からゆずりうけてくる」\*。「黒土のところで、林のなかにそだったタケがよく、そうした場所に生えるタケは節がたかい（節と節とのあいだが長い）」\* という。ソウケでは、節と節とのあいだが、39.39 cm ぐらいのタケが用いられる。「10月に切ったタケは虫がつかないといって、その頃にまとめて切り、40束から50束も、切りためておく」\*。

「切ったタケは、使うとき、タケの質にもよるが、2つに大割りにし」、立竹なら、「割ったタケを、はじめから（立竹の）2本分の幅に小割りしてゆき」\*、皮のほうから約4 mmの厚さにへぎ、「内側の身の部分は捨ててしまい、そのあとで、身と皮とにわけ、さらに2つに（立竹の幅に）割る」\*。廻し竹なら、大割りにしたタケから廻し竹4本分の幅のものをとる（長さは4.55 m から 5.45 m）。ソウケにつかう廻し竹は、へいで身のほうを捨て、2つに割り、さらに2つに割り、「お米が目にはさまらないよう、丁寧にカドをとり」\*、断面半円形状にしておく。「ここでは、身をつかうカゴは、めったに作らない。身をつかったカゴは、どうしても、売れないから」\*。

ここでは、立竹をホネ（骨）、廻し竹をヒゴと呼んでいる。

c 編み方

ソウケを編むときには、立竹をならべ、「まんなか（中央部）からヒゴをかけてゆく。ヒゴは縁のところまでひねり、いつも皮が外側に、カドをおとしたほうが内側になるようにする」\*。

「縁には、マルゾウケなら、154.53 cm の輪になるように曲げておいた厚い皮竹をいれる。輪の両端は9.09 cm ぐらい重ねあわせてハリガネでとめておく」\*。これに廻し竹をかけてゆく。

「縁には、まずウチブチ（内側の縁竹）をあて、次にソトブチ（外側の縁竹）をあて、そのあいだにホダケ（ササラのこと）をはさむ。ホダケは1本のタケを先からカブ（株）のほうにむかって10に割ったもので、縁は最後にハリガネで巻いて仕上げる」\*。

ソウケを編む過程で、いちばんむずかしいのはどの部分なのか。「ソウケは、足でおさえながら編むので、どうしても全体の形がたいらになってくる。それを、最後に形をとどめるとき、縁をおしこんでまるい形に仕上げる。その手加減がむずかしい」\* という。

ソウケの縁仕上げは、「昔は、山に生えているツヅラをつかったらしいが、ハリガネがはやくからつかわれ、ツヅラでかがったものは、だいぶん昔になくなった」\*。

カタクチソウケ（クチゾウケ）について、その値を計ってみると、長径43.5 cm 短径40 cm 高さ15.5 cm 重さ615 gで、縁の平面はタテヨコ40 cm 余りの方形のなかにおさまることがわかる。カタクチソウケはザル目編の半球体状のカゴで、長径方向に幅12 cm の口がついていて、長径上の約4：6の部分がかもとも幅がひろく、

そこが両手をかけるところともなり、また、立竹が集まるところともなっている。立竹は幅 10 mm 厚さ 1 mm で、皮竹と身竹を 1 本ずつ 1 組にし、短径の方向に平行になるようにおかれている。立竹の長さは、主要部分で 56 cm 前後で、立竹の 1 組を構成する 2 本のタケは、底のあたり、すなわち中心のところでは、たいらに 2 枚を透き間なくあわせておき（このあたりでの 1 組の幅は 20 mm となる）、両縁の縁にかかるところでは、2 本を 1 つに重ねあわせ、もっとも幅のひろい部分の両側の立竹は、重ねる箇所を 3 つに裂いて、重ねあわせやすくしている。ソウケには、長径方向に立竹がはいる型と、このソウケのように短径方向に立竹がはいる型とがあり、それによってソウケ全体の編み方も異なる。

廻し竹は、幅 2.5 mm 厚さ 2 mm の皮竹で、皮が表側にできるようにして立竹にかけてゆく。廻し竹の身の側(内側)は、面をとるといよりも、むしろまるく削られ、断面半円形である。廻し竹は、すべて、縁のなかにはいっているはずの幅 15 mm 厚さ 3 mm の皮竹(?)にかけ、このタケを越えるとき、ひとねじりしてかけてゆく。口の部分には、外側に幅 14 mm 厚さ 1 mm の皮竹がはいる。立竹は全部で 13 組である。

縁は野田口仕上げで、幅 20 mm 高さ 21 mm におよぶ。縁には幅 21 mm 厚さ 3 mm の皮竹を内側と外側とにあて、幅 15 mm 厚さ 4 mm のササラがはいる。ササラは、前記のとおり 10 に割り、17 カ所、ハリガネでかがってとめる。

津和野のカゴ細工で、もうひとつ忘れてならないものにアユカゴがある。すでに、民芸の領域で紹介され、高さ 34 cm 厚さ 10 cm、口の直径 11.5 cm、底の幅 15 cm で、口のまるい、肩の張ったビクである。このビクによく似た形のものとしては南西諸島の同じ用途のカゴなどをあげることができる [文部省史料館 1968: 113]。しかし、このアユカゴよりも、幅がもっとずっと厚い。なお、肩の線は、下から 15 cm のあたりにあり、総高の半分よりやや下の位置にある。

底編は変形のザル目編で、幅 7 mm の皮竹 7 本と幅 10 mm の皮竹 3 本で構成されている。これらの立竹は、いずれも胴の立竹として縁までのぼってゆく。幅のひろい 3 本の立竹のうち、まんなかの 1 本は、このカゴの肩の線を形作る。この立竹とその他の立竹とのあいだには、肩の付近で間隔があいてしまうので、途中から 2 本の立竹を加えて間隔をうめている。廻し竹は幅 2 ないし 3 mm の皮竹で、上半分に幅のせまい皮竹がつかわれている。

縁は巻口仕上げで、縁竹として幅 6 mm の皮竹をつかい、その上に幅 7 mm の皮竹を巻いてとめている。

このカゴには、力竹が巧みにはいる。両肩には 11 mm、中央 3 本には 13 mm、もっとも外側には幅 17 mm の皮竹がつかわれている。

#### d 種類

現在、ここで作られているカゴは、ソウケ、アユカゴ、トリノスなどである。

ソウケには、一般家庭でお米をとぐのにつかう片口型のクチゾウケと、正月の餅搗きのときモチゴメをいれる、いっそう半球体形のマルゾウケとがある。クチゾウケには大中小の3つの型があり、それぞれ、ゴショウトギ、サンジョウトギ、イッショウトギなどと呼ばれている。「実際にはいるお米の量は、ほぼその倍はいる」\*。ソウケの大きさは「口縁の長さできまり、中型のサンジョウトギでは、輪の長さ1.36m、立竹の数13本、立竹の長さ75.75cm、ゴショウトギは立竹15本で、輪の長さは中型より9.09cm長く、小型は中型より9.09cm短い」\*。

これに対して、マルゾウケは9.00ℓトギ18.00ℓいりで、口縁の長さは154.53cm、直径48.48cm、高さ18.18cmで、立竹15本で編むという。立竹の長さは78.78cmとなっている。このように、ソウケでは編み方が一定だから、主要な部材の寸法がきまることによって、おのずから、全体の形が規制されてゆく。

アユカゴは「アユ釣りに腰につけてゆくビクのこと」\*、「トリノスは、野菜とりなどに、畑へ背負ってゆくカゴ」\*で、いずれもザル目編である。

昔は、4軒から5軒ぐらいカゴ屋があり、旧村の範囲の家々からの注文でカゴをこしらえ、ときには、出張して、カゴを編んだという。

### 3. 岡山県真庭郡勝山町月田

#### a ところ

岡山県中部地方の商工業の中心地津山市から、新見行きの快速にのりかえて、約1時間ほど乗ると勝山駅につく。勝山町は、かつて三浦氏2万3千石の陣屋のおかれた場所で、現在でも古い町並がのこされている。町全体の85.3%が山林で、しかも水田の割合がたかく（耕地全体の64%を占める）、山林の78.3%は私有林となっていて、極度に集約的な林業がいとなまれ、また原木の集産地としても全国的に知られている。1972年の人口は11,682（世帯数3002）で、ここでもまた、それ以前の10年間に、第1次産業に従う人たちの数が6割から3.5割にまで激減し、そのかわりに第2次・3次産業に従う人たちの比重が2倍近く増加している。竹細工の生産地の月田は、勝山の駅から南西5kmほどのところにあり、勝山町竹工協同組合によって竹細工の生産販売がさかんにおこなわれている [勝山町 1975: 3, 6, 7, 8]。

#### b タケ

1971年度、通産省の伝統的工芸品の指定申請のために地元で調査された資料によれば、月田で昔から作られ、現在でも月田の竹細工を代表する製品といわれるソウケは、次の生産工程によって生みだされるという [勝山町 1976]。ここではその資料をもとにして説明してみよう。

1 「真竹」 月田の竹細工には「すべて岡山、広島中北部の寒冷山地のマダケ」がつかわれている。この地帯のマダケは、弾力性とみ、しかも、油脂を豊富に含む



という。

2 「選別と切り取り」 10月下旬から1月のあいだ、ツチ(土)の日を除いて(土の日に切ったタケには虫がついているという古い伝えがある)、一本一本、タケの良し悪しを吟味しながら、タケを切ってゆく。

3 「貯蔵」 切ったタケの色ツヤを保つため、通風のよい場所に貯えておく。

4 「寸取」 ソウケはワダケ(輪竹)、ソトワ(外輪)、ホダケ(穂竹)、ウチワ(内輪)、シンボネ(芯骨)、ヒゴの6種類の材料からなる。そのそれぞれの材料にあわせてタケキリノコギリで切断する。そのとき所定の寸法をとるためにつかわれる一種の定規をスنداケ(寸竹)といっている。スنداケは幅 30 mm のタケに物差のように目盛をしたものである。

5 「荒割」 切ってから6カ月以上経たものは、1日水に浸し、ナタで節をおとし、タテに2つに割る。これは大割の過程にあたり、大割、小割とも、柄の重い、全長 33.5 cm, 刃の長さ 20.5 cm, 刃の幅 4.5 cm の両刃のナタ(コガタナという)がつかわれる。

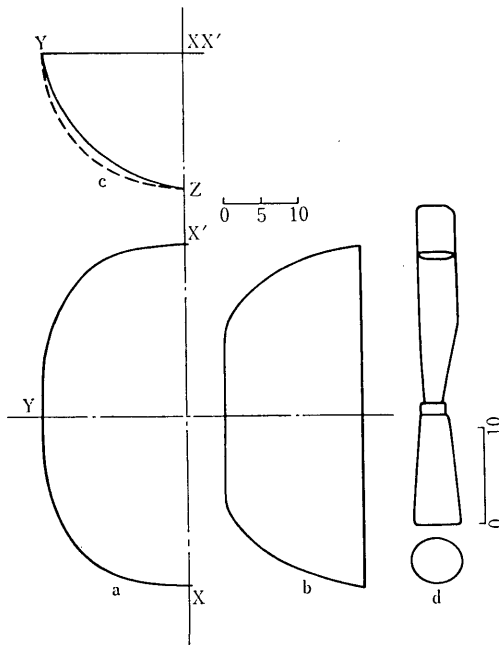


図1 勝山町月田のソウケとコガタナ

a はオオゾウケの平面図(ただし左側半分)。

XX' は長径の線を示す。ただし実線は口の内側の線をあらわす。

b はオオゾウケの断面図(長径面)。

c はオオゾウケの断面図(短径面)。点線は XY を半径とする円の線、オオゾウケのほうが、わずかに急なことがわかる。

d はソウケ作りの主要工具としてつかわれているコガタナというナタ。

表1 大割(荒割)から小割(細割)へ [勝山町 1976 による]

材 料	A		B		備 考
	幅	厚 さ	幅	厚 さ	
a ワダケ(輪竹)	20 mm	5—10 mm	16 mm	3 mm	両端はクサビ型
b ソトワ(外輪)	25	〃	22	1.5	
c ホダケ(穂竹)	17	〃	17	5	先端はクサビ型
d ウチワ(内輪)	26	〃	25	3—5	
e シンボネ(芯骨)	25	〃	21	1	4枚にへぐ
f ヒゴ	18	〃	2	2	

表のなかで、たとえば、a ワダケの場合、丸竹を2つに大割りしたものを、小割のうちAの過程で、目分量でハジから順に幅 20mm 厚さ 5mm から 10mm に割り、小割のうちのB過程で、さらに、幅 16mm 厚さ 3mm になるように削る。ただし、Aの過程ではへぐ作業はしない。

6 「<sup>ホソワリ</sup>細割」 荒割したものを、それぞれの材料の幅にあわせて、端から細かく小割りにし、所定の厚さにへいでゆく。タケをへぐことを、ここではへチルといっている。各材料は幅も厚さも細かく一定している(表1)。さらに削り台という台をつかって面をとる。

7 「編み」 材料がそろると、ワダケにシカケヒゴをかけ、チュウ(中)ヒゴ、アゲ(上)ヒゴ、ヘリ(辺)ヒゴ、ツメヒゴの順でヒゴをかけ、縁にウチワ、ソトワをあて、そのあいだにホダケをいれ、口をふさいで、「ツヅラというツヅラフジ科の植物のくきでかがって」野田口仕上げの方式で仕上げる。

8 「仕上げ」(略)

材料につかうタケは、「3年から5年のもので、伸びがよく、節が低く、色ツヤがよく、先枯がなく、もちろん、虫がついていないようなものを選ぶ」\*。いわゆる「目通りで 21 cm のものなら長さ 7 m から 8 m、目通り 24 cm のものなら 9 m から 10 m。節のあいだは、タケのまんなかの部分で 39.39 cm ないとつかえない」\*。そして、「ひとつのオオゾウケを編むのにタケが2本いる」\*。タケは、「昔からの経験で、黒土にそだったものよりも、岩山の、かたい赤土のところこそだったもののほうがつかいやすく、雑木林にそだったタケは、スギ林にそだったタケよりも、水気がすくなく、繊維が細かい」\* という。

表1は、大割から小割への割り方を、各材料ごとに表にまとめたものである [勝山町 1976]。ここでいうワダケは縁のなかにいれる縁竹、ソトワは外側の縁竹、ホダケはササラ、ウチワは内側の縁竹、シンボネは立竹、ヒゴは廻し竹のことで、ササラは、「根元から割ってきて、先端を 8 cm ぐらい残し、8本に割る」\*。ここでは、材料の長さや幅や厚さが、表に示すことができるほど、材料がはっきりと規格化されて

いる。それは月田のカゴ細工のひとつの特徴でもある。

10年ほど前から、タケは、「広島県東部の東城町、西城町、岡山県中部の加茂川町、御津町まで切りにゆく」\*。いずれも、40 km ほど離れた場所である。「ほとんど90%は自分で買いにゆき、一本一本みて、切ってくる。自分で切ったほうが、無駄がないし、作るにも自信がもてる」\* という。

スندگانには、元から166, 158, 155, 130, 86 cm のところに目盛があり、166 cm の目盛はソトワとホダケの長さ、158 cm の目盛はウチワの長さ、130 cm はヒゴ、86 cm はシンボネの長さを示す。ここでは、円周24 cm のタケから、根元の3節でシンボネ、次の3節でシカケヒゴ、まんなかの2節からアゲヒゴ、その上の2節でチュウヒゴ、その上の3節でヘリヒゴをとり、それよりやや細い、円周21 cm のタケの根元5節でソトワ、その上の4節でホダケ、その上の3節からウチワ、その上の3節でワダケをとるといふ。1本のタケでも、節と節とのあいだの長さは、下から次第に長くなり、また中心をすぎると漸次短くなる。その性質を利用して、各材料にあった部分をつかうよう、経験的に、タケの切り方まで規格化したのが以上のしきたりなのである。そこにはまた、1本のタケでも無駄なく利用しつくそうとする工夫がなされている。そのためには、タケを切るとき、1本1本タケの太さや材質を吟味して、材料がそろふようにすることが要求される。

ここでは、タケヘギは「ソウケの編み方をひととおり教わってから習う」\* という。「編み方を手がけているうちに、自然と、ヒゴの厚さやホネの厚みに対する感覚ができてあがる」\*。「ヒゴ作りをおぼえるまでには1年かかる。そして、最後に、シンボネを作るのをおぼえる。ホネは幅や厚さに差があってはならないから、シンボネを作る作業は、とくにむずかしい。いまでも、シンボネをやらされると、終わったらやれやれというほどだ」\*。シンボネは、皮とも4枚にへぎ、ヒゴは大割から幅18 mm に小割りしたものを、節をおとし、まんなかから2つに(幅9 mm)し、それを2枚にへぎ、さらに4つに割って、幅2 mm にまで幅をせばめてゆく。タケをへぐとき、タケの切口にナタ(コガタナと呼ばれている)でキズをいれ、ナタを垂直にたてるようにして、ナタの背中の方でタケをわけてゆく。ナタの刃のもとのほう7 cm の部分には刃がなく、そこをにぎって、柄と刃先との均衡をとりながらへいでゆく。

### c 編み方

前記の資料によれば「編み」の工程はさらに6工程にわけられている。ここでも、前記の資料をもとにして説明してみよう。

1 「輪作」(ワヅクリ) 縁のなかへ入れるタケ、すなわちワを作る工程で、ワの両端はハリガネでとめておく。ワの形は隅丸の短形で、「曲り角に節がこないように気をつける。こうして一度曲げたタケは、もうもとへはもどらない」\*。

2 「芯入」(シンイレ) ヒゴには5つの種類がある。ソウケの長辺が正面にくる

よう、ソウケをおいてみると、まんなかがややくぼみ、底の線は弓なりに曲っていることがわかる(図1)。このくぼんだ中央部のヒゴをシカケヒゴ(仕掛ヒゴ)、その両端のヒゴをナカグミ(中組)、その外側の腰立直前の部分にあたる部分のヒゴをアゲヒゴ、腰立のヒゴをヘリヒゴ、さらにその両外側のヒゴをツメヒゴとよんで、完全に識別している。5種類のヒゴは、曲り角に当てるヒゴはそのヒゴなりに、まんなかにかけるヒゴはそれなりに、幅や厚さが微妙に異なる。もちろん、それは手加減ひとつで作りわけられる。月田のソウケの場合、立竹は長辺の方向にむけていれるが、立竹をたいらにならべ、まんなかにかけるヒゴを21本かけ、片側のコボネにかけ、次にまんなかのシンボネにかけ、それからコボネの順で繰返してゆく。立竹(ホネ)には、シンボネ(芯骨)とコボネ(小骨)とがあり、シンボネをまんなかに入れ、コボネをその両側にいれる。シンボネはコボネより幅が広く、コボネは中心から外側へ、順に、イチバンボネ(1番骨)、ニバンボネ(2番骨)、サンバンボネ(3番骨)という。

3 「中組」(ナカグミ) シカケヒゴの両側にナカヒゴをかける工程で、ナカヒゴは20本である。そのとき、立竹を締めつけるようにして目をつめてゆく。

4 「上げヒゴ」(アゲヒゴ) シンボネの両端を曲げ、ワにかける。コボネの末端は口で5つに細かく割り、まる味をつけるよう、ワにそってたわめながら縁にかけてゆく。それにアゲヒゴをかけ、ほぼ全体の曲率がきまる。

5 「刃りヒゴ」(ヘリヒゴ) 皮ヒゴ(皮作りのヒゴ)10本にニクヒゴ(肉ヒゴ、身竹の廻し竹のこと)7本を、全体の形をそろえるようにしながら、かけてゆく。

6 「ツメヒゴ」立竹のすぼみ具合を調整しながら、皮ヒゴ、ニクヒゴを交互に8本ずつかけてゆく。

ここでは、以上の製作工程そのものが、ソウケを作る仕方を修得する過程と直接に結びついている。

ソウケを「習いはじめて、はじめての人はナカグミの工程を受けもつ。はじめてでは、ホネのかけ具合、ホネの間隔のあけ方のみこめていないから、あらかじめ、シカケヒゴをかけておいたのをまわして、ナカグミをさせ」\*、立竹の間のとり方をおぼえさせる。「次にシカケをかけるのをおぼえ、それから3教程目にヘリヒゴ、4番目にツメヒゴ、5番目にアゲヒゴとなる」\*。「アゲヒゴまでかけられるようになれば、ひとつのソウケを、だいたい、独力で作れるまでになっている」\*。そこまでくるのに2年はかかるという。「縁の仕上げの仕方も自然におぼえ、ヒゴの厚みやホネの厚み加減も、おのずからわかってくる」\*。こうした作業をくりかえし、そのうちには、「1日1つぐらいしかできなかつたものが、6つも7つも作れるようになる」。そこまできて、はじめて、いわゆる仕事になるのである。

材料のタケから各部分の材料をとる取り方、各部分の材料の作りわけと使いわけ、

各部材に細かく呼び名をつけ、はっきりと識別するやり方、しかも、それらが、作業をすすめる上で巧みに分業化され、ソウケ作りを習いおぼえる訓練の過程と結びつくこと、それらの技術上の特色は、あるいは、他の地域のソウケ作りにも、多かれすくなかれみられることかもしれないが、それが、月田のソウケの場合には、典型的に、かつ見事に体系化され、量産の手法として確立されている。

オオゾウケは、手元のソウケによれば、高さ 19 cm で、他の地方のソウケにくらべ、いっそう深くなっている。口は長径 48.5 cm、短径 43.5 cm で隅丸の短形、断面をとってみると、前記のように、左右面では半円形、前後からみると舟底形で、しかも、両端が深く、まんなか 5 mm 程度浅くなっている。重さは 805 g で、やや重く感じられる。立竹は、まんなか 4 本が幅 22 mm の身竹で、その両側 5 本が幅 15 mm の身竹でこの幅のせまいほうの身竹は、縁に近づき次第、中心から両翼にひろがるようにいれてあり、その部分 10 cm ほどのところは 5 つに割ってある。廻し竹は、すでに説明したように、わずか 70 cm の曲面に、幅 2 mm から 1.5 mm、厚さ 2 mm から 1.5 mm の皮竹や身竹が、各部分ごとに使い分けられている。全体の形にくらべ、廻し竹の幅がやや細く、したがって、編み目の密度の高いことも、このソウケのひとつの特色かと思われる。

縁は野田口仕上げで、縁の幅は 20 mm 厚さ 22 mm、内側と外側に厚さ 1.5 mm の皮竹をいれ、そのあいだに厚さ 3 mm の皮竹を 8 つに割ったササラをいれ、それを太さ 2.5 mm のツルで 17カ所かがってとめている。縁はセイが高く、幅がひろく、単に丈夫であるばかりでなく、全体を手堅くひきしめるのに役立っている。

廻し竹やササラにつかわれているタケの節もまた全体に変化をつける、ひとつの要素となっている。

#### d 種類

月田では、現在、ソウケのほか、果物や魚のモリカゴ（盛りカゴ）、パンカゴ、買物カゴ、花器、食器いれ、ドジョウカゴ、テンプラやザルソバ用のカゴ、飯籠などが勝山町竹工協同組合を通して出荷され、例年、全国展示会にも出品され、東京の百貨店にも進出している。その生産額は 1975 年度 6700 万円におよぶという。また、民芸として高く評価され、すでにひろく紹介されている。

ソウケには、オオゾウケのほか、メシゾウケ、コメアゲゾウケ、コエゾウケ、ミゾウケの 5 種類があり、それぞれ形や大きさを異にしている。オオゾウケは月田のソウケを代表する製品で、コメ 18 l はいるところから、おコメを俵につめるとき、マスとしての役目はたし、ムシロにほしたモミを取りいれたり、秋の収穫期には、現在でも、さかんに用いられている。一名タンガメゾウケと呼ばれている。コエゾウケは田畑へほどこす肥料の運搬、ミゾウケは、いわゆる石箕で、土木工事のときの土砂、小石の運搬につかわれている。ソウケの生産は、月田の竹細工の生産の約 4 割を占め

表2 ソウケの規準

種 類	長 さ	縁竹の長さ	ヒゴの長さ
1 オオゾウケ		157.06 cm	155.00 cm
2 メシゾウケ A		130.29	87.85
メシゾウケ B		136.35	81.81
3 コメアゲゾウケ		130.29	115.14
4 コエゾウケ		166.65	127.26
5 ミゾウケ		(略)	(略)

ソウケの大きさは縁竹の長さできまる。

ていると推定されており、昔から板箕をつかう島根県津和野地方や、収穫に桶をつかう習慣のある広島県の一部をのぞき、岡山・広島両県内に出荷されているという。勝山町竹工協同組合では、現在51人の組合員が生産にたずさわっている。1971年の資料によれば、生産に従う人たちの年齢構成は、40代・50代が半数を占め、60代が15.7%、70代以上が13.7%で、ここでも後継者の養成が問題化しつつある。また、経験年数では15年以上20年未満・20年以上25年未満の人たちが、それぞれ29.4%、10年以上15年以下・25年以上30年以下の人たちが、それぞれ19.9%で、いずれも豊富な経験の蓄積を物語る。

#### 4. 岡 山 市

##### a ところ

岡山地方は、昔から竹細工の産地として全国的にも名のとあったところである。ここには、岡山市を中心に岡山県竹製品工業組合があり、県全体で約600人が加盟しているという。市内だけでも、組合員は24人で、昔は、青年学校でも竹細工の講習が正課にとりいれられたほどで、戦前戦後を通じて、盛りカゴや花器などを中心に、輸出用の竹細工もなされた。「コメアゲザルでもパンカゴ（他の地方でいう御用カゴ）でも岡山のものは丈夫なことで定評があった」\*。

##### b タケ

材料はマダケで、「4年から5年のものを使う」\* という。材料のタケは、岡山市附近でも得られたが、山ぞいの地帯まで切りにいった。「若いときには近在の山へタケを切りにいった。津山線の野野口や高梁川中流右岸一帯」\* で、いずれも市内から12 km から 15 km 離れた場所である。「昔はよいヤブ(藪)が、ところどころにあったので、たくさんのタケのなかから、よいタケを選んで切ってくる。よいタケだけを切ってくるのだからタケを切るのが実にたのしみだった」\*。「タケは、アキギリ（秋

切り) といって、9月に切ったものがよい]\*。「川べりのタケは細工がしやすいが性質はよくない]\*。反対に「赤土のところに生えるヤマダケは節は低いが、性質がよく、ゆるみがない]\* という。「切ったタケは、昔は馬車をたのんで車につけて家まで運んだ]\*。

切ってきたタケは、カゴを作るとき、「4つに大割りにし、ホシカゴ(後出)の場合には4枚にへぎ、そのほかの内側の部分は捨ててしまう]\*。「身を余計につかう果物カゴでは6枚から8枚にへぐ]\*。へぐときには、ここでも、口でへぎ取るほうのタケのサキをくわえ、へぎおとすほうを足の親指でおさえる。なお、「ヤブから切ってきたタケは表側にアカがついているから、割るまえに洗う。竹細工を習いはじめて最初にさせられる仕事はそれで、それから、タケを大割りにする仕事や、タケへぎをおぼえる。タケへぎでは、最初にアラへぎ(荒へぎ)をおぼえ、その後、さらに細かくへぐ作業をする]\*。

ここでは、立竹をタツ、廻し竹をヒゴダケといっている。

### c 編み方

ホシカゴは、エビやハゼなどを干すのに一般の家庭で使うカゴで、農村地帯では梅干などをつくる时候にも使われる。「どこの家庭でも、日常、割によくつかわれるカゴで、都市部では小さいホシカゴ、農村地帯では大きいホシカゴが使われている]\*。

立竹は周囲18cmほどのロクスンダケなら、16に小割りにし、幅10mm長さ50cmの寸法にそろえておく。廻し竹は、ロクスンダケなら16に小割りにしたものを、さらに4つずつに割り、よいタケなら、幅4mmにしておく。

ホシカゴの底編は4つ目編で、「たくさん作るときは、最初に4つ目の見本を作っておき、その上にタケをならべて、目の大きさがそろえるようにする]\*。また、「廻し竹を余りつかわないような6つ目のカゴしか編まない、俗に(目のあるカゴだけを専門に作る)メモノシ(目物師)という人たちは6つ目のホシカゴをつくる]\*。カゴの底の編み方には、「6つ目のほか、ザルでは菊底、ミソコシのようなものにはアジロ編がある。しかし、アジロは年寄がやったくらいで、いまでは岡山ではほとんどしない]\* という。

縁仕上げは野田口仕上げで、この編み方をヒラブチといっている。「また、ハリガネで縁竹をくくるので、トリブチともいう]\*。「縁の仕上げ方にも、その人の流儀によって、ヒラブチの上手な人とマキブチ(巻口仕上げ)の上手な人とがあり、どうしても自然に、マキブチ専門の人はヒラブチをきらう]\* ようになる。野田口仕上げにするときには、「縁まできたタケを折るかえし、とくによいカゴなら、その先端を全部とめるが、普通は上下2本の廻し竹でハジをとめ、そのサキは切り揃え、ウチブチ(内側の縁竹)をあて、それからソトブチ(外側の縁竹)をあて、そのあいだへ、センボンワリ(干本割、ササラのこと)をいれる。センボンワリはタケのサキから割ってス

エ（根本のほう）をのこす。センボンには、1本のセンボンダケを6つに割る]\*。縁をかがるのに、「一般にはハリガネをつかうが、なかにはカズラをつかうところもあり、高価なカゴの場合にはトウ（籐）がつかわれる]\*。

ここでは力竹をハリダケといい、「カゴの本体ができあがったところで、後で差しこみ、それから手をつける]\*。

「カゴを編むとき、もっともむずかしいのは、底から胴をおこすときで、口がひろがらないように しかも、縁がまるみをもつように、立竹をおこしてゆく]\*。

手元のホシカゴの本体は、高さ8cmのザル目編のカゴで、カゴ全体、都会的な洗練された味わいをもっている。総高32cm、タテヨコ38cm、重さ515gで、皮竹の青さが身竹の色に調和して色彩感をただよわせている。実際には、このホシカゴより、ひとまわり大きいカゴが、よく使われるという。

底は26cm四方で、幅12mmの皮竹（しかも薄い皮竹）をタテヨコ4本、都合8本用い、それを罫の字の形にいれ、それに幅12mmから14mm、厚さ1mmの身竹を8本ずつ、全部で16本で底編を構成する。目のタテヨコは、おおむね9mmとなっている。底まわりのタケには身竹がつかわれている。

廻し竹は幅4mmの身竹と皮竹で、それをいっしょにして縁まで12段にかけてゆく。

口の形はタテヨコ38cmの隅丸の方形で、縁の幅は12mm、高さ20mmで、内外に厚さ1.5mm内外の皮竹をいれ、そのあいだに6つに割ったササラをいれ、幅3mmのトウで巻いて17カ所をとめている。このカゴでは野田口の重ね目に工夫がしてあり、外側の縁竹をササラの根元の位置よりも5cmほど長くとり、縁にとりつけられた手のなかへ通すようにして、なにげなくとめている。

底には幅20mm厚さ3mmの皮竹が力竹としていれてある。力竹は底の四隅を対角線状に結んでいれてあり、底の組織を引きしめる効果を充分にはたしている。

手は幅15mm厚さ3mmの皮竹2本を組み合わせで編んである。手の形は、ほどよい半円形で、持ちやすいよう、面がきれいに取ってある。縁から縁までの手の長さは約60cm、その両端60cmは、それぞれ3枚にへぎ、曲げよくし、外側から縁にまわし、ひとひねりして隣りの手に巻き、最後に、外側から胴の編み目に深さしこんでとめている。この最終部では幅がややせまくなるように削ってある。手の画く曲線といい、手の幅といい、取りつけ方といい、そこには、タケ本来の持ち味をよく生かした、なにげない心づかいがなされている。意匠的にも、このホシカゴは学ぶべきものを多くもっている。

#### d 種類

昔から、このあたりでは、ホシカゴのほか、ミソコシ、ミズキリ（ザル）、メザル、コメアゲザル、それに農業用のカゴとして、ハツミカゴ、クサカゴ、堆肥運搬カゴ、



ナエカゴ（苗カゴ）、クワツミ、そのほかバンカゴなどが作られたという。

そのなかで、ミソコシ、メザル、ハツミカゴなどの、まるい形のカゴを、ここではマルモノ（丸物）といい、これに対してバンカゴのような直方体状のカゴをカクモノ（角物）という。また、6つ目カゴをメモノといい、「それぞれ得意にしてそれだけを専門に作る人たちがあり、マルモノ師、カクモノ師、メモノ師などと呼んでいた」\* という。ここでは、このようにしてカゴ細工にも、はやくから専門分化がおこなわれていたことがわかる。それに、入れ子のトリコミカゴなどのような工芸的な竹細工をする人たちは<sup>ぶんしんし</sup>文人師といわれている。そこに、この地方の竹細工のもつ、ひとつの雰囲気を感じとることができる。

### Ⅲ. 若干の考察

1 以上、ここでとりあげた、いずれの例からもうかがえるように、中国地方のタケカゴ細工は、大局的にみて、マダケを素材にしたタケカゴ細工の発展としてとらえることができる。さらにいえば、マダケの皮竹と、それに近い良質の身竹を材料にしたカゴ細工の発達としてとらえることができよう。中国地方のタケカゴ細工の場合にも、たしかに、農業や養蚕の用具としてのタケカゴ細工を発達させた過去をもち、身竹を多く用いたカゴ細工も作られたが、しかし、現在では、ほとんど、皮竹と皮竹に近い身竹のみを利用し、身の多くを捨ててしまうようなタケカゴ細工に収束されつつあると思われる。そのことはまた、タケへぎの技術や、タケ作りの習得方法に、すくなく影響を与えている。

2 中国地方のタケカゴ細工を特徴づける手法のひとつに、ザル目編で縁を野田口仕上げにしたカゴの手法がきわだつ。そのよい例は、ここでとりあげた、鳥取地方の「カゴ」やソウケであり、岡山のホシカゴである。もちろん、野田口仕上げの手法は全国的にみられるし、巻口仕上げや共縁の手法が中国地方で行われなかったのではない。それに、勝山町月田や津和野でみてきたように、ソウケではこの縁仕上げの手法は、立竹のかけ方からいって、ほとんど必然的なものですらある。それにもかかわらず、中国地方のタケカゴ細工といえば、ザル目編で野田口仕上げのカゴが思いうかぶ。それはまた、素材としてのタケの質やタケ作りのあり方とも密接に結びついている。

3 カゴの生産面で、とくに注目しなければならないのは、月田ソウケの場合である。すでに記したように、月田ソウケでは、ソウケを形作る各部分ごとに幅や厚さの異なる材料がつかわれ、それが、組合の多くの人たちのあいだの仕事上の分担（協同作業）を前提にし、作りわけられる。この材料の作りわけは廻し竹（ヒゴ）にまで及び、あたかも、ひとつの機器が幾つかの部分品から組み立てられるように、系統だって生産されてゆくのである。その生産を分担する人たちの仕事は細かく専門化し、そ

れがまた竹細工の習得の過程とも重なりあう。このような多量生産のすすめ方は、多くの職人をかかえた工房や協同作業による竹細工が、全国的にほとんどみられなくなっている現在では、きわめてまれな例なのではなかろうか。

4 中国地方のタケカゴ細工で、とくに注目してよいのは、都市におけるタケカゴ細工、とりわけ、在来の生活に用いられるカゴの手法を踏まえながらなされている工芸竹細工の存在である。もちろん、鳥取や岡山のみならず、幾つかの古い都市には同じような傾向がみられる。しかし、「文人師」という表現に示されているように、ここにははやくから工芸竹細工への方向が用意され、現在では、その線の上にある人たちによって、すぐれた生活のカゴが作られている。ここにあげることができた岡山のホシカゴも鳥取の「カゴ」も、いずれもそのよい例である。月田のカゴ細工や津和野のカゴ細工は、これまで、すでに民芸の分野でとりあげられているが、それ以外、都市生活を背景にした、これらの竹細工のなかにもまた、中国地方のタケカゴ細工が行きついた、ひとつの集約点をみることができるとはなかろうか。

## 謝 辞

小文を構成するため、あらためて、1977年8月、9月にかけて採訪をおこなった。資料を提供して下さった、鳥取県立博物館、島根県津和野町教育委員会、同津和野郷土館、岡山県勝山町役場商工観光課、勝山町竹工協同組合、岡山県立博物館、芸北民俗博物館、また、御多忙中のところ、とりわけ、細部にいたるまで詳しく教えて下さった、小橋竹かご店の小橋磐雄、田村筆一、勝山町竹工協同組合の川元富士雄、双田徳太郎、調査に立ち会っていただき、ないしは御教示を仰いだ鳥取県立博物館の鶴田憲弥、福井淳人、津和野町教育委員会の森澄泰文、勝山町商工観光課の矢谷欣二、岡山県立博物館の竹林栄一諸先生に、心から、お礼を申し上げたいと思う。なお、この小文では直接とりあげることはできなかったが、いつもながら山口地方の資料について、東京教育大学大学院の坪郷英彦、高梁川流域の資料について財団法人日本はきもの博物館（広島県福山市松永町）の潮田鉄雄両氏からおおしえをいただいた。

## 文 献

勝山町

1975 『かつやま——勝山町町勢要覧』 岡山県勝山町。

1976 「(伝統的工芸品の指定申請にともなう調査資料)」 勝山町竹工協同組合。

津和野町

1975 『津和野——津和野町町勢要覧』 津和野町。

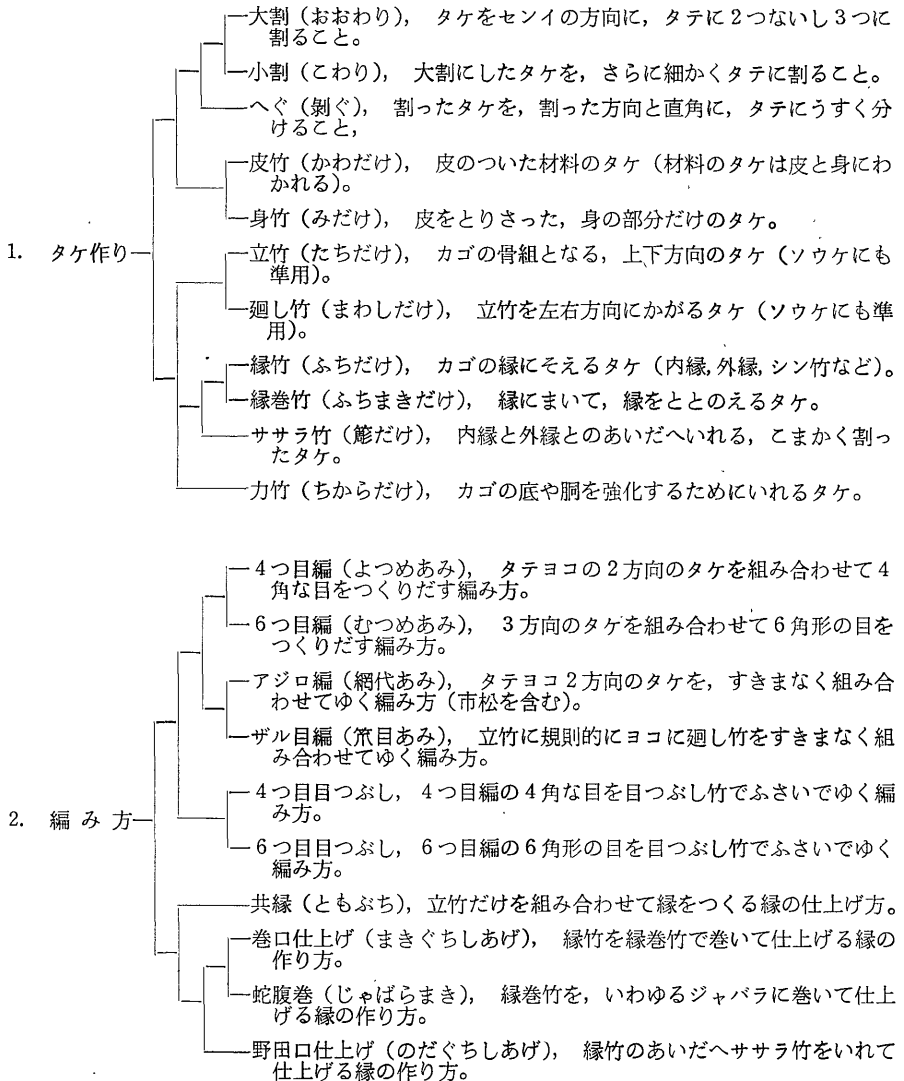
鳥取市総務部企画室

1976 『鳥取市統計要覧』 鳥取市。

文部省史料館

1968 『文部省史料館所蔵民族資料図版目録』2 文部省史料館。

附表 「日本列島におけるカゴ細工の諸系列」使用のカゴ細工用語集

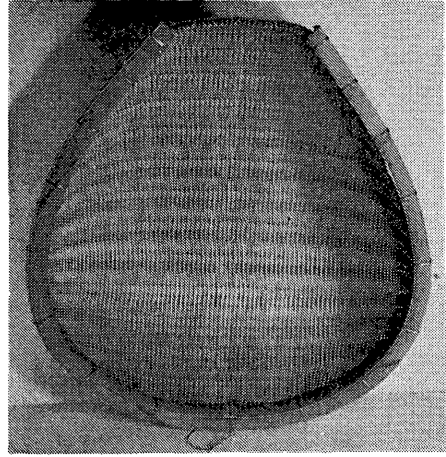


\* カゴ細工の用語は， その土地によって特有の呼び方があり， 必ずしも一定していないので， とりあえず， 上の表を作った。ここでは， なるべく数すくない用語ですむように工夫した。

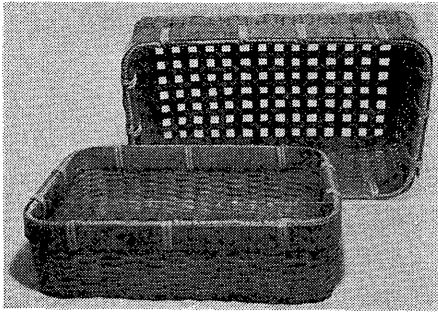
\* 試みに実線で用語同志の関係を示した。



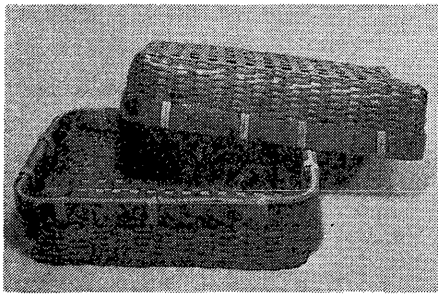
1



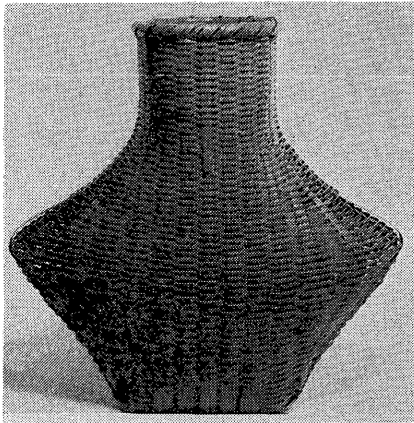
2



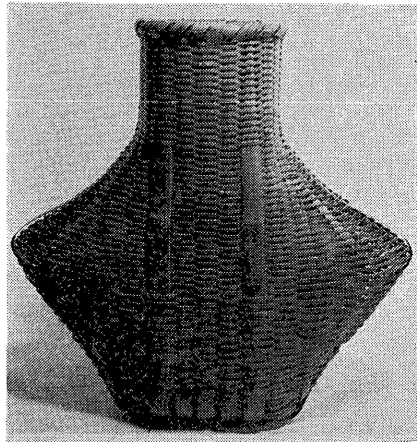
3



4



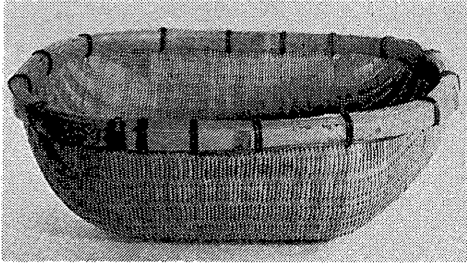
5



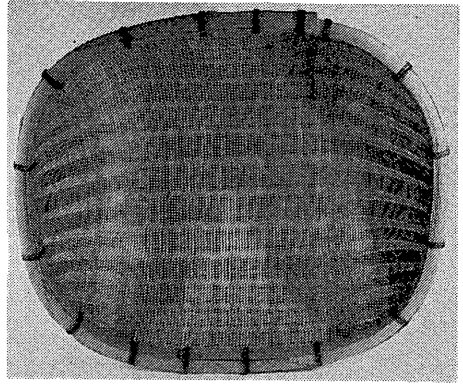
6

附図1 中国地方のタケカゴ細工

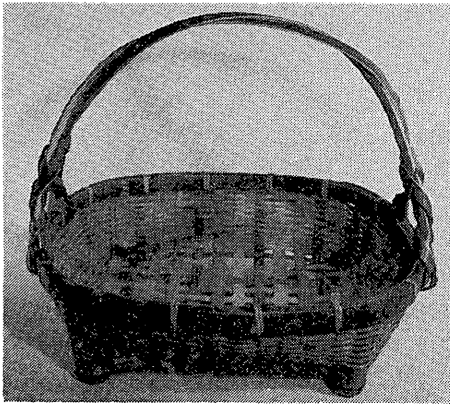
- |               |                |
|---------------|----------------|
| 1 鳥取市のテカゴ     | 2 島根県津和野のクチゾウケ |
| 3 鳥取市のメカゴ     | 4 鳥取市のメカゴ      |
| 5 島根県津和野のアユカゴ | 6 同 (裏側)       |



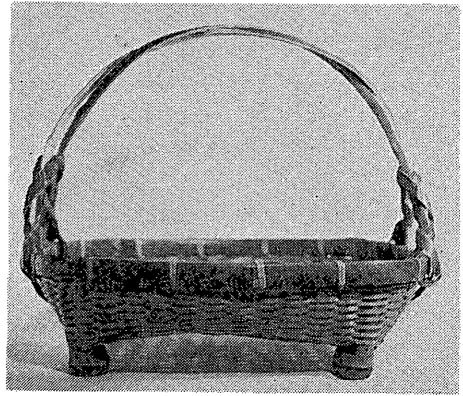
7



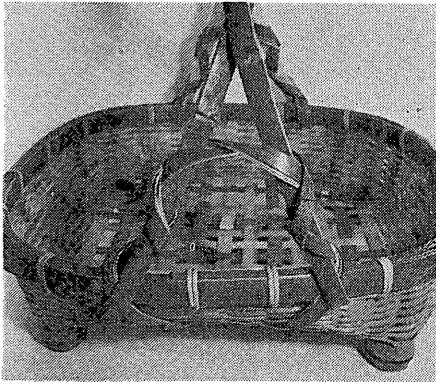
8



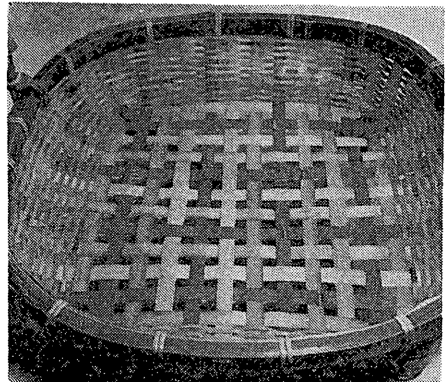
9



10



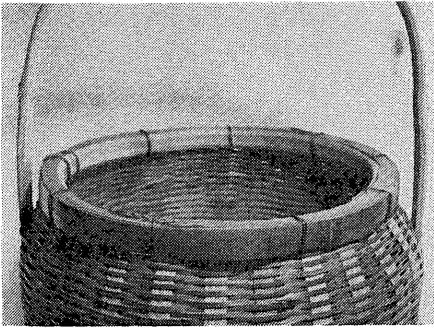
11



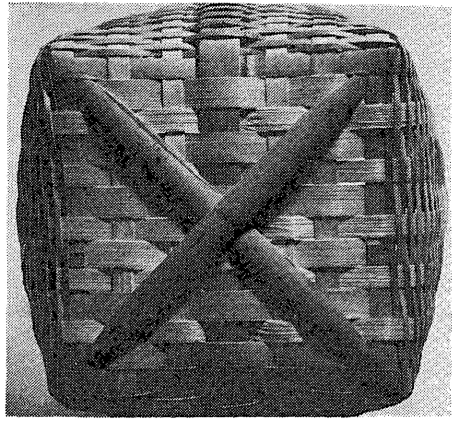
12

附図2 中国地方のタケカゴ細工(つづき)

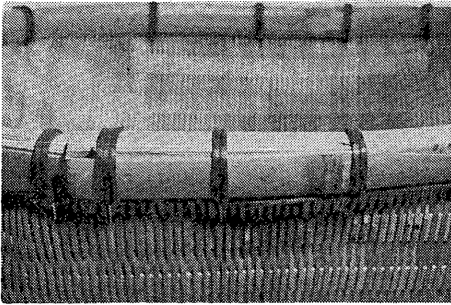
- |                  |                 |
|------------------|-----------------|
| 7 岡山県勝山町月田のオオゾウケ | 8 同 (上から)       |
| 9 岡山市のホシカゴ       | 10 同 (側面)       |
| 11 岡山市のホシカゴ(細部)  | 12 岡山市のホシカゴ(底編) |



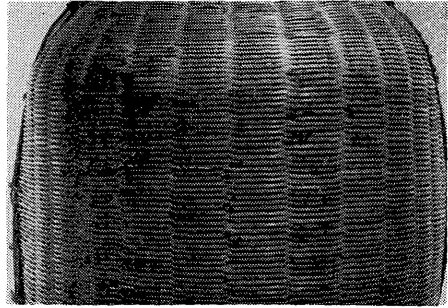
13



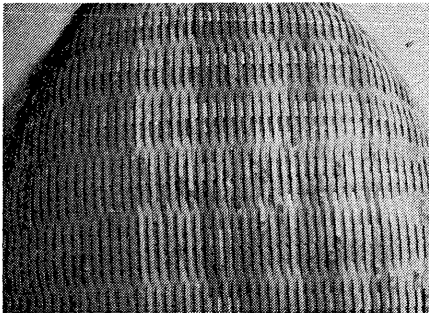
14



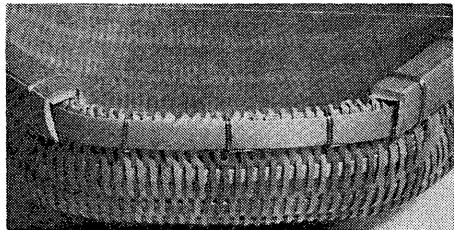
15



16



17



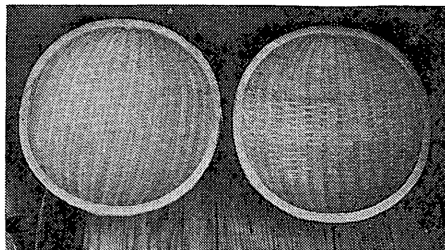
18

附図3 中国地方のタケカゴ細工(細部)

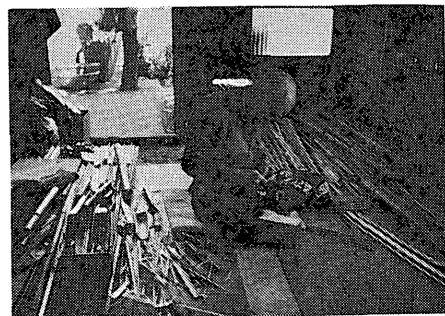
- |                      |               |
|----------------------|---------------|
| 13 鳥取市のテカゴの縁編        | 14 鳥取市のテカゴの底編 |
| 15 岡山県勝山町月田のオオゾウケの縁編 | 16 同 オオゾウケの底編 |
| 17 島根県津和野のクチゾウケの底編   | 18 同 クチゾウケの縁編 |



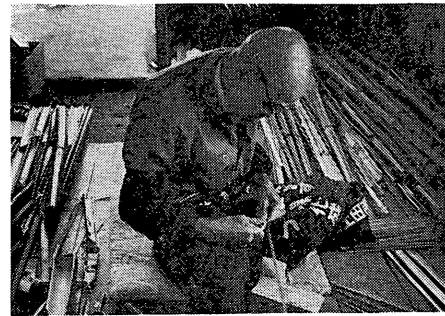
19



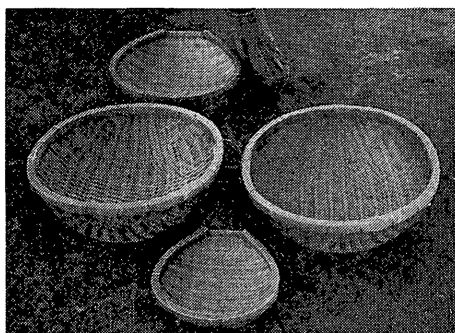
20



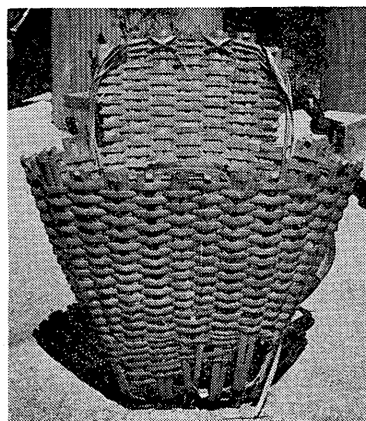
21



22



23



24

附図4 島根県津和野のカゴ細工

- 19 手前はマルゾウケ，後はクチゾウケとアユカゴ
- 20 マルゾウケ（左が大，右が小）
- 21 細工場
- 22 タケをへぐ
- 23 マルゾウケとクチゾウケ
- 24 トリノス（背負カゴ）